

実践総合農学会第6回地方大会（2日目）

～東京農業大学短期大学部研究プロジェクトの取り組み～

●研究の目的 中山間地域は里山といわれる地域。美しく自然豊かな里山景観は、農林業中心の人々の暮らしにより守られてきた。中山間地域の約6割は過疎地域である現状と同様に里山の原風景を残した鮫川村でも里山景観の荒廃が進んでいる。この研究は典型的な中山間地域の鮫川村を対象とした特定地域研究で、山村環境、遊休荒廃農地の再生に寄与する研究に取り組むこととした。

●報告内容 館短期大学部長をコーディネーターに次の研究内容が報告されました。

■入江彰昭環境緑地学科准教授

- ・山村環境の整備、再生、発展に関する研究
-館山公園の整備、再生-

■鈴木伸一環境緑地学科教授

- ・鮫川村の植物的自然に基づいた景観構造とその解析
-環境整備の基盤としての総和群集法を用いた景観区分の試み-

■篠原卓生物生産技術学科准教授

- ・鮫川村のダイズ生産安定に関する研究
-鮫川村で生産されたダイズの種子活力調査-

■穂坂賢醸造学科教授

- ・かぼちゃ(土手かぼちゃ)を活用したかぼちゃ焼酎の開発
(鮫川村の村花(やまゆり)からの有用酵母の分離とかぼちゃ焼酎への利用)

■石田裕栄養学科教授

- ・鮫川村における新規特産品開発および特産品創出のための調査
-鮫川村の水資源の活用-



館 博教授
【東京農業大学短期大学部長】

東京農業大学短期大学部長の館博教授から、これまでの鮫川村との関わりや連携協定までの歩みを報告。その後、鮫川村を事例とした中山間地域の活性化に関するプロジェクトの取り組みが紹介されました。また、教授らから研究課題が報告され、成果をもとにした村の活性化の方向が議論が行われました。



中山間における6次産業化の取り組みが話されたシンポジウム



あいさつを述べる大澤貴寿東京農業大学長

[クローズアップ] 東京農業大学 実践総合農学会 第6回地方大会

東京農業大学が事務局となっている「実践総合農学会第6回地方大会」は11月5日・6日の2日間、村公民館で開催されました。この学会は、昨年6月に村と同大学が連携を結んだことにより本村での開催が実現しました。初日は、NARO食品総合研究所の林清所長が「放射能汚染と風評被害」と題して基調講演が行われた後、同大の高野克己教授、農研機構九州沖縄農業研究センターの後藤一寿氏、鈴木治男村役場総務課長がそれぞれ報告。引き続き、六次産業化をテーマにしたパネルディスカッションが行われ、報告した四人が出席者の質問に答えました。

2日目は、「地域資源を活かした鮫川村の活性化-東京農業大学短期大学部研究プロジェクトの取り組み-」をテーマにした地域シンポジウムと「食・農・環境」に関わるユニークな実践事例や研究成果を報告する個別研究報告が行われました。

初日の夜には、「鮫川の恵みと食文化を堪能する」をテーマにした交流会が開かれ、村内の農産物をふんだんに使った料理を味わいながら村おこしについて交流を深めました。



村内の農産物をふんだんに使った料理を味わいながら、交流を深めた

シンポジウムで、研究を実践に移していく要望を訴える大楽村長



【個別研究報告】

食・農・環境に関わるユニークな実践事例や研究成果が、2つの会場で学生から報告されました。

このうち、西山字馬場地内の山林と渡瀬字中山地内のほ場で、「森林土壌が炭素ストックに果たす役割」をテーマに、実証実験を実施。発表では、学生から実験の報告が行われました。



杉林の中でデータを採取する学生



個別研究報告の様子